The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	ビハール運動とその後
Author(s)	鈴木, 良明
Citation	印度民俗研究. 1978, 5, p. 1-16
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/50345
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

「ビハール運動とその後」

鈴　木　良　明

1　はじめに

非常事態宣言下，一年以上にわたって投獄され，3月の下院選挙にジャナター党（人民党）からビハール州バクサル地区で立候補し，当選したビハール州の民衆指導者の一人，ラーマーナンド・ティワーリー氏が「ビハールのハリジャン（不可触賤民）の中には，いまでも牛糞の中から未消化の穀物をさがしだして食べるほどの貧困にあえいでいるのである．ヒンディー語地区から，ほとんどの大臣をだしているのに，その地区内にあるビハール州はインドの中で最も遅れた州の一つである．それは指導者が本気になって貧困を追放しようとは考えていないからである．」[1]と語ったように，ビハールは貧困という問題以外にも，それに係わる諸々の問題をかかえた州である．それは，行政上の問題から教育・経済・文化とあらゆる問題にわたっており，インドのかかえるすべての問題をビハール州がかかえているといっても過言ではないであろう．

そのビハール州の持つ問題，換言すればインドの持つ問題に対する改革運動が1974年3月に起きた．それを，インドでは「ビハール・アーンドーラン」（ビハール運動）と呼ぶ．この「ビハール運動」は次第に北インド全体に影響を与へ，翌年のインディラ・ガーンディー前首相の選挙違反の判決と相まって，インディラ政権打倒の嵐の中に吸収されていったとみてよいだろう．

この小論では，インドの1つの州での政治運動史を通して，それがもつ全体的意味と，その運動がどのように展開され，今日に続いているかを，できるだけ今日的政治状況を把えながら述べてみようと思うものである．

2　ビハール運動の背景

1971年の総選挙で，「ガリービー・ハターオ！」（貧乏追放）のスローガンをかかげたインディラー・コングレス（会議派与党）は大勝利を収め，[2]　続く州議会選挙でも勝利を収めた．インドの国中が一致団結して，インドの慢性的貧困を追放する方向へ向っているかにみえ，インディラー・ガーンディー首相の人気は最高潮に達していた．しかしながら，実際の政策は「ガリービー・ハターオ！」に向っての前進ではなく，「ガリービー」（貧困）を増大させるほうへとむかっていた．1965年より始めた農業への機械化導入の「緑の革命」は農業生産力を増大させたものの結果的には農民層の分解をもたらし，小作人の農業労働者化を増大させていったし，中央集権的社会主義政策路線は地方経済の発展をそれほど増進させなかった．加えて，'72年から'73年にインド各地を襲った旱魃による農業生産の落ちこみは，農業依存度の高いインド経済に大きな打撃

を与えた．それと共に，全世界の非石油産出国を襲った石油ショックはインドにも波及し，経済不振へ一層の拍車をかけた．土地をもたない農業労働者は貧困の基準のその下に投げこまれ，地主の退蔵食糧の売りおしみ，仲買人の買いだめで農業製品だけではなく，日用品のせっけんにいたるまで市場から姿を消してしまった．当然の如くに物価は急騰し，農民だけではなく，都市に住む労働者までもが生活に苦しまなければならなくなった．このような生活不安を反映して各地でストライキや学生デモが起き始めた．グジャラート州ではサンガタン・コングレス（野党会議派）とジャン・サング（人民連盟）とが団結して'７４年１月１日にグジャラート州議会の解散を求める運動を展開し，２月にはインドの民衆指導者ジャヤプラカーシ・ナーラーヤンがグジャラート州都アハメダーバードを訪ずれ，運動の支持と激励をした．学生達は口々に「インディラー打倒」のスローガンを唱え，ついに３月１５日にはグジャラート州議会の解散にまで発展した．この間の中央政府・州政府は次第に力による弾圧をおこない，インディラー政権の性格を明らかにしはじめていた．このグジャラート州の州議会解散に刺激されたビハール州の学生達は３月１８日に１２項目の要求（８項目は教育改革，４項目は社会改革）を掲げ，州議会にデモ行進を行なった．こうして始まったビハール運動は各地に飛び火し，ビハール州の各地でデモ行進が日に日に激しさを増していった．

ここでビハール州についての若干の説明を加えてみたい．ビハール州は北はネパール，東は西ベンガル州，西は北部州（Ｕ．Ｐ．）と中央州（Ｍ．Ｐ．），南はオリッサ州に接しており，面積は１７３．８７６平方キロメートルある．夏は雨の降らない乾燥した酷暑が３月から５月まで続き冬は冬で厳しい寒さがビハール州を襲う．夏には熱風で，そして冬には寒波で毎年幾十人という人々が命を失なう．そして雨期には，ガンジス河上流からの水量が増し，毎年パトナ近郊で氾濫を起こす．人口は，１９７６年３月１日現在で６１，４８４，０００人で，[3] インドの総人口の１割がこのビハール州に住んでいることになり，この人口の７７％が農業経済に依存しており，大多数が貧しい小作農・農業労働者である．そしてビハール州では少数部族，アウトカースト人口も多く１９７１年のセンサスでは，約８百万，そのうち少数部族人口は約５百万人を数える．また，ビハール州には，ボカロ鉄鋼都市があり，年産４百万トンの鉄鋼を生産している．これまでの説明で推測されるように，ビハール州そのものがインドそのものと換言することもできる．すなわち，インドは，農業国でありながらも，鉄鋼の生産では世界の４分の１を生産する国であり，天候如何によっては国の経済に大きな影響を与え，カースト，少数部族問題をかかえ，ということになれば，上述のビハール州の説明と同じになってしまう．事実，１９７２年に襲った旱魃は，ビハール州を不毛の地としたし，それによる影響は大きかった．各地で「米よこせ」デモも起きた．インドにおける旱魃の被害とは，ビハール州の旱魃の被害とも換言することができる．また，１９７４年４月１日まで，工業開発資金として，１６８億ルピーの資本を投じたにもかかわらず，１人当りの収入は２２州の中で２０番目であり，[4] １９７０年調査では貧困の水準以下の人口はビハール州総人口の４６％であり，[5] これも，インドの行政上のスローガン「ガリービー・ハターオ！」の該当地区なの

である．このようにビハール州のも諸々の問題がそのままインドのかかえる問題を代表していると言ってよいだろう．そしてこれらの問題，例えば貧困問題にしろ未就業人口の解消に関する問題にしても，ただ単に資本さえつぎこめば，それでこれらの問題が解消されるというものではなく，[6] 実はそれらの問題解決の拮抗力としてインドの複雑な社会機構。慣習が大きく関与しているのである．そして，それらはヒンドゥー社会に伝統的な封建制であり，カースト是認思想であり，バーイー。バティージャー主義（族閥主義）等々であり，これらが何らかの形でそれらの問題解決を阻止する要因となっていると言えよう．そして，不可触賤民や少数部族の多いビハール州では特にこの傾向が根強く残っており，社会的後進性という名で代表される．ビハール州の代名詞が社会的後進性と呼ばれる反面，ビハール人にはイギリス統治時代から反権力闘争を繰りかえしてきた伝統とそれによってインドの政治史を色取ってきた[7]という自負と闘争心を持っているが故に，自らの州の改革の為には自ら闘わなければならないという認識とともにそれが全インドに及ぼすという自信をも持ち合わせている．したがって，インドのかかえる問題をそのままビハール州のかかえる問題として置きかえることができるとともに，それに対する闘いもビハール州を出発点として始まると言っても過言ではない．この気風は１９７０年代に入っても失なわれず，社会党からは，ジョージ。フェルナンデスがでて，鉄道ストの指揮をしたし，今回のビハール運動には学生が中心になり，教育制度の改革，教育の場での汚職追放，結婚持参金制度の廃止，未就業人口の解消等を要求して立ち上がったのである．そして，それは，ただ単に要求事項に盛り込まれたことに対しての行動ではなく前述したビハール州の全ての問題を背景に立ち上ったと言っても過言ではない．それは後述するが現実的には，学生を中心に１２項目の要求を掲げて始まったビハール運動がのちに，全体改革運動に変革して行った過程の背景には，ビハールのこれらの問題の認識があったからに他ならない．

３　Ｊ。Ｐの参加と運動の発展

３月１８日に始まった，ビハール運動は各地に波及し，なかでもガヤーでは４月７日に女性による４マイル行進がおこなわれた．そして，４月８日，ジャヤプラカーシ。ナーラーヤン，パトナ学生闘争委員会，ビハールサルボダヤ協会，一般市民，パトナ存住の作家，ファニシュワルナート。レーヌをはじめとする作家。芸術家。詩人が参加して不服従運動が展開された．デモ行進参加者は，それぞれ口にはマスクをし，腕には喪章をつけ，両手をうしろにまわし，「攻撃されても抵抗しない」というスローガンを掲げて不服従沈黙行進を行なった．翌日，８日，パトナー市のガーンディー公園で民衆集会が開かれ，この席上でジャヤプラカーシ。ナーラーヤンがこのビハール運動の指導者として確認された．このビハール運動の最前線に立つ学生闘争委員会は，学園の民主化。汚職の追放，教育改革，社会慣習の改革，行政上の汚職の追放，未就業人口の解消，貧困追放の要求とともに州議会の解散をも要求していた．指導者のＪ。Ｐは，この学生闘争委員会の要求をほぼ支持しながらも，州議会解散要求については態度を留保していた．

４月１２日，ガヤーの学生デモ行進を警官のジープが阻止しようとし，そのジープの前に座り込みをした学生に警官による実力行使が行なわれた．逃げまどう学生を路地まで追いつめての官憲

による実力行使（棍棒による排除と発砲）は，ビハール州議会議員５０人の辞表提出と中央政府への直訴，郡役所長の辞任と発展した．Ｊ。Ｐは，このニュースにガヤーに駈けつけ，惨事のあとを視察し，このビハール運動に州議会解散要求をも盛りこむことに同意した．このガヤーの発砲事件に抗議して，パトナーでは作家や文化人が断食を行なった．その折，彼らは民衆を目覚めさせるため，そして民衆の間への宣伝活動の為に「民衆闘争芸術団」（Jansangharshī Racnākār Manc）を組織し，辻々で集会や詩の朗読会を開く計画をたて，作家。文化人の動きも活発化していった．芸術大学のミュシュラ氏を中心として，運動の模様や官憲との衝突の模様が描かれ，毎夕，その展示会がパトナの町のどこかの辻で開かれた．詩の朗読会にはビハール州だけではなく，ラクナウからも詩人の支持者が駆けつけて朗読。演説が夜おそくまで続けられた．[8] このような経過を経て，ビハール運動は次第に学生だけの運動ではなく，政党にかかわりのない大衆運動へと変化していった．Ｊ。Ｐは４月２０日の演説で，政党によらない大衆運動であることを強調し，ビハール州の新しい社会機構を作りだすための運動であることを宣言した．しかし，政党によらない大衆運動と規定したところで，会議派与党，それにべったりとよりそっているインド共産党にしてみれば，反対政党が連合して国民会議派政権の引きおろしに全力をそそいでいるようにしか考えられなかった．ビハール州各地で州議会解散要求署名運動がくりひろげられているなか，加えて，Ｊ。Ｐが病気療養の為にパトナーを離れたすきをねらって，インド共産党は州議会解散要求に屈しないよう州政府激励のデモ行進をおこなった．Ｊ。Ｐをアメリカの手先とみるインド共産党は「Ｊ。Ｐは破れた．アメリカに電報を打て」のスローガンをかかげていた．それに力を得て，翌日（６月４日）前代未聞の軍隊のトラックや軍人の威圧行進がパトナー市でくりひろげられた．それは，このビハール運動を力で阻止しようとする州政府の姿勢をはっきりとあらわしていた．そして，その翌日はパトナー市ガーンディー公園でおこなわれる民衆集会へ出席しようとしたデモ行進の列へ，インディラー。ブリゲードの一員が発砲する事件が起きたし，この集会に参加するために集まった若者。市民達が正当な理由なしに逮捕される事件が相次いだ．この集会の壇上で，Ｊ。Ｐは，この運動をもはやビハール州の問題としてだけではなく，中央政府へむけての運動にしていかなければならないことを強調した．[9] この日の演説は約１万５千語に及ぶ演説で，それは自らの留学時代の想い出から始まって，ネルーとの交友。決別，そしてビハール運動の諸政策，インディラー。ガーンディー批判，コングレス批判，それに関連する選挙費用の節約等，単にビハール問題だけではなく，中央政府にもその鉾先はむけられていった．これを，Ｊ。Ｐはビハール運動の一歩進んだ「全体改革運動」（サンプールン。クラーンティー）と規定づけし，運動の続行を宣言した．

それは，ビハール運動の要求事項そのものがインド全体のかかえる問題であり，それを力で押えようとする州政府権力は，そのままインディラー。コングレス，換言すれば中央政権に結びついているという認識に基づくものであった．

4　サルボーダヤ運動と全体改革運動

ここで，ビハール運動，後に全体改革運動へ変革していった運動の目標と，Ｊ。Ｐの指導の方法

についてみてみようと思う．

全体改革運動の目標は７本の柱で成り立っている．それらは，社会改革，経済改革，文化改革政治改革，道徳改革，教育改革，精神改革である．[10] ここで気づくことは，政治，経済，教育改革以外は，サルボーダヤ運動の目標とそれほど大差ないということである．それは，ビハール運動から始まった運動が一貫して，サルボーダヤ運動の指導者の一人であるＪ。Ｐとビハール州サルボーダヤ協会によって支えられているからであるという理由ではない．それは，このビハール運動，全体改革運動の指導者，Ｊ。Ｐの思想によるものであると言える．従来のサルボーダヤ運動について言えば，それは一般的に保守的な運動と理解されていた．それは，これまでのサルボーダヤ運動が，まず大衆が道徳的によい行いをしてゆけば，自然に社会もそれにしたがってくるという教え方と，ビノーバー師の宗教的とも言える影響力によってなされていると理解されていた．これに対し，Ｊ。Ｐは全体改革運動とサルボーダヤ運動の目標が同一であることを認めているが，Ｊ。Ｐによれば「全体の改革なしに，全員の向上（サルボーダヤ）はあり得ない．[11] というのが基本的な考え方である．全体改革運動の目標はサルボーダヤ（全員向上）にあり，インド社会において抜本的な社会改革は全員向上につながらないとみるのである．この方法論的相違が正にＪ。Ｐとビノーバー師の思想上の相違ということができるであろう．ガーンディー主義を継続して，サルボーダヤ。サマージ，ブーダン運動から始まったサルボーダヤ運動が２０数年経た今日でも著しいサルボーダヤ（全員向上）がないということをＪ。Ｐは認識していたといえよう．Ｊ。Ｐは，この従来のサルボーダヤ運動の運動方法の限界の認識の上に立って，より積極的に，そしてガーンディー主義の行動的視点に立って社会を改革してゆこうとするものである．

それに対して，ビノーバー師の立場は，同じガーンディー主義でも，マハートマー。ガーンディーの精神の継続であり，聖者としての超世俗的なもので，サルボーダヤの運動を人間の道徳。倫理に信を置いての運動であった．そして，このビノーバー師のこのような思想こそ，後の非常事態宣言下に起きた事件や非常事態下，インディラー首相の行動をも容認したという誤解を招く結果となるのである．主題と時代とが前後するが，この問題について若干ふれておかなければならない．ビハール運動。全体改革運動。非常事態宣言下を通じて何万人というサルボーダヤの会員が逮捕投獄されても，ビノーバー師は沈黙を守っていた．そればかりか，非常事態宣言下においては，インディラー首相はビノーバー師を敬い花輪さへ贈っていた．このようなことが誤解を招く結果となったことはいうまでもない．又，Ｊ。Ｐに対しては政治から身を引くように助言したビノーバー師[12]がインディラー首相の専制的な政治に対して口を閉ざしていることも誤解を招く結果となった．非常事態宣言下，カルプーリー。タークル氏はビノーバー師に再三手紙を送り，失望のあまり「あなたは，インディラー首相を怖れるあまり，Ｊ。Ｐの名さえ口にされるのをはばかられるのですか．独立運動当時，Ｊ。Ｐが投獄されていた時に，マハートマー。ガーンディーが，『Ｊ。Ｐが牢よりでてこないかぎり私は安心しておれない』とおっしゃったことがありました．あなたは，国の為になることを何もおっしゃらない．そのような人をマハートマー。ガーンディーの後継者だとは言えないし，言う権利もないのです」と書き送った．[13] このように，ビノーバー師の思想は精神に基

づいたものであり，これまでの運動が非政治的，倫理的，道徳律に基づいた運動であった．したがって，３月の総選挙で当選したサルボーダヤの会員のラームジー・スインハ氏は，「サルボーダヤは政治と無関係では」という雑誌の質問に答えて「国に民主主義が実現しない限り，全員向上（サルボーダヤ）は実現しない．国会に参与することは，民主主義を守るためである．」とはっきりビノーバー師と異る見解を述べている．[14]

このように，Ｊ・Ｐの指導で，ビノーバー師流のサルボーダヤ運動とは異なる，より積極的で政治的な，換言すれば社会主義的思想（これは決してガーンディー主義と異なるものではない）に基づいた運動が全体改革運動であるということができよう．一見，ビノーバー師のサルボーダヤ運動と目標は同じように見える，それが方法論的に大きな違いがあり，その違いこそＪ・Ｐとビノーバー師の思想の相違である．そして，今日的サルボーダヤ運動は，大部分がＪ・Ｐ的立場に立ち運動が展開され始めていることを，ここに記しておきたい．それとともに，それでもなおかつ，サルボーダヤ運動，全体改革運動両方を通じて，一応，ビノーバー師への尊敬の念が失なわれていないことも記しておこう．ただ，今だに，インディラー夫人に「アーシルワード」（祝福）を与え続けるビノーバー師に対しての民衆の風当りが強いことも明記しておかなければならない．[15]

5　全体改革運動からインディラー政権打倒運動へ

ビハール運動から全体改革　運動へと変革していったこの運動は，１１月になると最大の山場を迎えた．それまでに，ビハール州の各地では，サンガタン・コングレス，ジャン・サング，バーラティーヤ・ロークダル（ＢＬＤ，インド民主党），ジャン・サングの下部組織のラーシトリーヤー・スワヤン・セーワク・サング（Ｒ・Ｓ・Ｓ），それとナクサライトによつて学生闘争委員　会，人民闘争委員会が結成されていった．オリッサ州，中央州，カルナーフカ州，パンジャーブ州，デリー，ラジャースターン州，ハリヤーナー州の野党は，ビハール州のこの運動に刺激されて，ビハール運動を自らの州で展開する準備を始めた．

１１月に入ると，ビハール州の州都パトナー市に厳重な警戒網が敷かれた．パトナー市に入ってくるバス・列車・自動車はすべて権力によって止められ取り調べを受けた．そして，パトナーへ行くというだけで多くの人々が逮捕されていった．州政府の建物は頑丈な防護柵でかためられた．１１月３日の夜には，ビハール州サルボダヤ協会に集まっていた約２千人の人々が逮捕された．[16]そして，翌４日，ガーンディー公園に集まった民衆は州議会へむけてデモ行進を始めた．デモ行進の列が途中の橋にさしかかると，橋のむこう側に待機していた警官隊が一斉に催涙ガス弾を発射し橋を境いに戦場と化した．それは，まさに「ジャン・シャクティ」（人民の力）と「ラージャ・シャクティ」（権力）との対決であった．先頭をゆくＪ・Ｐの頭上へも権力の力による攻撃がおこなわれた．それでもデモ行進は権力の壁をのりこえ橋をわたっていった．それは，「ジャン・シャクティ」の勝利であった．だが，国民会議派州政権は力にまかせて自らの州政権を守り通すことに専念した．それは国民会議派州政府が辞表を提出するということは，インディラー政権打倒の気運が高まりつつある状況のなかでそれに追い打ちをかけることに他ならなかったからである．このビハ

ール運動の期間中の死者７０名，負傷者約５百人，警官の発砲５４回，逮捕者にいたっては数知れずというものであった．[17]

年が明けると，北インド全体にインディラー打倒の波が立ちはじめた．ビハール運動をはじめ各地で起きているストライキと合わせて，１９７１年の下院議院総選挙の際のインディラー首相の選挙違反の判決が６月にイラハバード高等裁判所でおこなわれることになっていた．判決の日が近づくにしたがって国中がその判決に関心を寄せ，６月に入ると，Ｊ。Ｐ，モラールジー。デサーイその他反対党のメンバーが集まって，インディラー。ガーンディー首相に直ちに辞表を提出し，首相を辞めるよう声明を発表した．続いて，ジャン。サング，ロークダル，サンガタン・コングレス社会党，アカーリー党が連合してインディラー退陣を要求して運動を起こすことを決めた．こうして，インディラー退陣要求の声が日増しに高まっていった．

６　選挙違反判決と非常事態宣言

１９７１年３月の下院議員選挙に，インディラー。ガーンディー首相は北部州ラーイバレーリー地区から立候補した．対立候補は社会党のラージ。ナーラーヤン氏であった．インディラー首相は１８３，３０９票を獲得し，７１，４００票のラージ。ナーラーヤン氏に大きく水をあけて大勝した．４月１０日，ラージ。ナーラーヤン氏はインディラー首相の選挙は選挙違反の疑いがあるとして，イラーハーバード高等裁判所へ告訴した．

ラージ。ナーラーヤン氏の告訴の理由は次のようなものだった．

＜１＞　ガーンディー夫人の選挙の参謀のヤシパール。カプール氏は政府の役人であるにもかかわらず，選挙運動の為に仕事をした．

＜２＞　ガーンディー夫人の選挙事務所の事務員が，ヤシパール。カプール氏の指示にもとづき，有権者に毛布。掛蒲団。酒等の贈り物をした．

＜３＞　ヤシパール。カプール氏やその他の人の指示によって有権者を無料で投票所まで車で運んだ．

＜４＞　インディラー。ガーンディー選挙事務所は法定選挙費用よりも多い費用を使った．その額は９２７，０３０ルピー．

＜５＞　同候補応援の為，ヤシパール。カプール氏は選挙区で演説する為，空軍の飛行機。ヘリコプター。操縦士，役人を利用した．

＜６＞　ガーンディー夫人は，宗教的に尊敬されている雌牛と子牛のシンボル。マークを自派の選挙マークとして用いた．

以上は，１９５１年の公職選挙法（Public Representative Act）１２３条第７部第１章の選挙に関わる汚職（選挙違反）にふれるものである，という理由である．

その公職選挙法には，賄賂，宗教的影響を利用する選挙，有権者を無料で投票所まで送迎すること，法定選挙費用より多く出費，選挙演説その他の為に政府の役人の利用をすること等が選挙違反にあたるとされる．

そして，ラージ・ナーラヤン氏の告訴に対して，イラハーバード高等裁判所の裁判官，ジャグモハン・ラール・スィンハ氏は6月１２日，贈賄については証人不足（証拠不足），投票所までの送迎も証人不足，シンボル・マークについては，確かに雌牛はヒンドゥー教においては神聖しされているが，ヒンドゥー教においては雌牛だけが神としてあがめられているというわけではないという理由で取り下げ，選挙費用については，告訴されている選挙金額は，ヤシパール・カプール氏が全額選挙費用として使用したのではなく，国民会議派と政府を通じて首相の安全保護対策として使われた費用も含まれており，それは法定選挙費用としてはみることができない．ただ，インディラー・ガーンディー夫人は１９７０年１２月２９日の記者会見でラーイバレーリー地区から立候補することを表明し，ヤシパール・カプール氏は政府の一役人であるにもかかわらず，１９７１年1月１７から２４日までガーンディー首相の選挙区で選挙運動をしたし，彼の援助を受けたということは，公職選挙法１２３条第７部内の選挙違反にあたると判決した．そして，１９７１年の選挙を無効にし，判決の日（６月１２日）から６年間立候補できない旨言いわたした．この判決に，野党各党は首相に辞表提出をせまった．Ｊ・Ｐは，この日の演説で首相の辞任と警官，軍人に対しては法律に反する命令には従わないよう訴えた．それに対して，首相は，インドを大国にしたのは誰れなのか．それは自分ではなかったのか．と彼女一流の強引な論法で反論し，大衆に訴えた．だが，反対政党によるインディラー政権打倒運動は激しさを増し，６月２５日には，インディラー政権に対する非協力そして税金不払運動デモ行進がおこなわれた．

その夜，首相は治安維持の為に敷くことのできるという憲法３５２条[18]に基づき国家非常事態を適用することを指示する．それまで，インドにおいて国家非常事態宣言は２度行なわれていた．１度目は，１９６２年の中印紛争の際に４年にわたって敷かれた．２度目は，１９７１年の印パ戦争の時に適用され，いづれも外国の攻撃から国を守る為に敷かれたものであった．そして，３度目すなわち6月２６日の朝，アフマド大統領によって非常事態が宣言された．

だが，現実的には首相のの保身の為と，反インディラー運動弾圧の為であることは明らかであった．国家非常事態宣言によって，それに関連する憲法３５３条（中央政府統治とそれに関する法律の作成），３５５条（各州の治安維持は中央政府が行なう）が適用され，すべての州が中央政府によって統治されることになり，６月２７日には，憲法３５９条，１４条，２１条，２２条が適用され，個人の法廷での抗弁権が取り上げられてしまった．

そして，８月１０日の第３９回憲法改正によって，首相は，ラージ・ナーラヤン氏の告訴を無効にし，自らの座を確保したのである．[19] そして，ここに，インド２８年の民主主義は終りをむかえ，インディラー専制政治が確立したのである．

7　非常事態宣言下の社会

国に非常事態宣言と同時に，インド国内は暗黒と化した．報道規制が敷かれ，反政府運動家は逮捕・投獄され，言論の自由が失なわれた．[20]※ 反政府運動の指導者，ジャヤプラカーシ・ナーラヤン，モラールジー・デサーイ氏等の名を言うことさえ危険なことであった．国中に警察力がゆきわ

※以下を挿入（逮捕時にその理由を問うことさえ罪とされた）

たり，警察のすることが，すなわち，インド政府のすることであると同じ意味を持っていた．市民は私服警官にもびくびくしなければならなかった．政府の批判を口に出して言うことが危険なことであった．紅茶を求める警官に，「お代はいただけるのでしょうか」と問うただけで茶店の主人は投獄されていった．

ガーンディー政権は，７月１日にラジオを通じて２０項目の経済政策を発表した．だが，この２０項目の経済政策は政権自ら従来から成し得なかった政策でしかなかったし，ビハール運動を通じて，Ｊ。Ｐが訴え続けてきた問題であったのである．そして，２０項目の経済政策と都市再開発と美化という名目で，弱者や貧乏人のスラムや家はブルドーザーで取りこわされ，トラックでゴミクズ同然に郊外へつれてゆかれ，置き去りにされた．都市からは掘立て小屋が取り払われ，商店は店頭に値段表を出さなければならなかった．都市は一見美化されたかに見え，商品は定価販売されるようになった．店々には，首相の写真が飾られた．まるで，首相の写真が飾られていない店は現政権に反対しているかのように，それは一種の踏絵としての意味を持っていた．非常事態宣言と同時に首相の次男のサンジャイ。ガーンディー氏の出現もインディラー専制政治の性格を一層明確にした．コングレスの下部組織のユース。コングレス（国民会議派青年部）の議長として突然政治の舞台へおどり出たサンジャイ。ガーンディー氏は，インドの発展の為には，第一に人口増加をくい止めなければならないとして避妊手術を奨励することを第一目標とした．避妊手術のキャンペーンに行く彼のうしろには訪問先の州首相。大臣がぞろぞろと続き，各州。各地区がまるで避妊手術の目標達成競争をしているかのようだった．サンジャイ氏の発言力も日増しに強まり　国会議員でもない一介の政党の下部組織の青年部の議長の力が中央政府の大臣の力に等しいか，それ以上になっていった　避妊手術運動は強力に押し進められ，避妊件数の少ない地方は警官が農村を襲って青年男子から老人までつかまえての強制避妊や，役所や学校の教師にノルマを課し，そのノルマの達しない者には給料不払いがおこなわれたし，ビハール州では既婚。未婚にかかわらずスクーターの免許を得るには，まず避妊証明書を提示しなければならなかった．駅の物売りや道路で物を売る営業許可を得るにも避妊証明書が必要だった．デリーだけでも１９７６年１月からの１０ヶ月間で１２万人が避妊手術を受けた．[21]　非常事態下でも町は一見平穏に見え，そしてこの状況に慣れるにしたがって，政権が安定したかに見えた．人々は，非常事態宣言以来，町は美化され，物価は安定，強盗，窃盗，殺人が少なくなり町の治安が保たれたと思い始めていた．非常事態宣言後一年で，インド経済は国民総生産で５．５％の上昇を記録し，天候の順調なせいもあって農業生産は８％増加した．[22]　首相のこの２０項目の経済政策は一応の成果を経済的側面からみたら実際に上げたことになろう．だが，非常事態は経済危機の為に敷かれたのではなかったのである．インディラー首相は自らの地位を守るために敷いた非常事態を，あたかも経済開発の為であるかのように国民の目のまえで転化させてみせたのである．非常事態下での政策が成果を上げていることに自信を得た首相は総選挙を一年繰り上げて行なう構えをみせて新年を迎えると，続々と政治犯を釈放した．そして，１月１８日，総選挙を決定した．首相は，今回の選挙は外国からの圧力で総選挙を決定したのではなく，反対政党が仮に総選挙に勝てば，インド民主主義の終えんを意味するという見方に立ち国民に

「統制のもとでの民主主義を選ぶか，それとも混沌（カオス）を選ぶか」という自信に満ちた選択を迫った．

8　総選挙とその結果

総選挙が行なわれることが発表されると，その時までに釈放されていた反対政党のJ・Pやモラージー・デサーイ氏を中心にジャン・サング，サンガタン・コングレス，インド民主党，社会党の他に国民会議派のチャンドラ・シェーカル氏が加わり連合政党，ジャナター党（人民党）が結成された．この連合政党結成の可能性は，すでに1973年から74年にかけての一連のストライキやデモ，グジャラート運動・ビハール運動を通じて芽ばえてきたものである．

選挙運動が開始されると，与党コングレスは「混沌か発展か」というスローガンで民衆にその選択を迫ったのに対し，ジャナター党は「民主主義か専制政治か」と迫った．選挙運動期間中も非常事態が適用されており，報道規制により，テレビ・ラジオ・新聞などは国民会議派寄りの報道一色であった．与党コングレスが圧倒的な優位に見えた．国民もジャナター党支持と声を大にして言う人も数少なかった．会議派のバルアー総裁は，「インディア・イズ・インディラ，インディラ・イズ・インディア．」とインディラー首相の功績を讃えた．2月2日，コングレス中央選挙委員会に出席中のインディラー首相とバルアー総裁に国民会議派の実力者でハリジャンに圧倒的支持を受けているジャグジーワン・ラーム農業灌漑大臣の辞表が提出された．それは，インディラー政権にとっては大きな打撃であった．ジャグジーワン・ラーム氏は元北部州首相バフグナー氏，オリッサ州元首相ナンディニ・サトパティ夫人等を伴って，コングレス・フォア・デモクラシーを結成した．この結成の目的は，現在の与党会議派ではなく，昔の会議派，すなわち，民主主義と社会主義を目標とするためであるとする．そして，このコングレス・フォア・デモクラシーはジャナタ党と協力して選挙を闘うことを決める．国民の心にも，国民会議派の大物，ジャグジーワン・ラーム氏の脱党によって次第に新政権への希望と期待感が芽生えてきた．2月6日の夕暮れニューデリー・ラームリーラー公園で開かれたジャナター党の演説会場には，どこからともなく集まってきた民衆であふれた．段上でJ・Pは，今回の選挙はどの政党が勝つか負けるかではなく，民主主義をよみがえらせるか否かであり，この選挙で民衆は国と自分の運命とを決めなければならないと演説した．丁度，その日の夕刻，テレビでは古い映画を6時から放映することになっていたが，突然5時半からすなわち演説会の開始する時間から，つい数ケ月まえに上映された人気映画『ボービー』を放映しはじめた．[23]　その夜のテレビ・ニュースでも，ただひと言，「今日，ラームリーラー公園でジャナター党の演説会があった．」というようなものであった．これに対して，ガンディー夫人の遊説とサンジャイ氏の遊説は特別番組に組み込まれ，テレビを持つ者の視覚へと飛び込んできた．それまで表面的には立候補をしないかのように装っていたサンジャイ氏は北部州アメティー地区から立候補することになり，それとともにユース・コングレスのメンバーを立候補させる件と5項目のユース・コングレスの政策を掲げたことで，会議派内に物議をかもし，また，共同路線を敷いていたインド共産党との仲にもヒビを入れた．首相は遊説の先々で非常事態宣言のおかげでどれだけ国民

に利益があったかを力説し，ジャナタ一党の楽観主義者的民主主義は存在しようもないことを説いてまわった．その間にもコングレスからの離脱が増え，選挙戦は日増しに激しさを増していった．3月1日，ニューデリー。ボート。クラブ公園では，午前中，国民会議派の演説会がガーンディー首相の指揮のもとに行なわれ，政府各省の上級役人，ユースコングレスメンバーと遠くハリヤーナー州とデリー近郊の農村から狩り集められた農民の前で首相が演説を行なった．同じ場所で夕方，ジャグジーワン。ラーム氏，アターリー。ビハーリー。バージペー氏を中心にジャナタ一党の演説会が開かれた．ジャグジーワン。ラーム氏は集まったデリーの勤労者の前で演説した．「インディラーさんは，ほんのチョットの間だけ非常事態を敷くと私に言ったが，そのチョットの間というのがいつまでのことなのかわからない．国民会議派のだれかがいうておった．インディラ。イズ。インディア．インディア。イズ。インディラ．だが諸君，インドは，インディラーさんだけの国ではないのだ．インドは，我々の，そして諸君の国なのだ．」集まった聴衆は「ジャグジーワン。ラーム，ジンダーバード！J。P，ジンダーバード！ジャナタパーティー，ジンダーバード！」のシュプレヒコールをくりかえし，その声は暮れなずむデリーの空にすいこまれていった．3月のこの演説を境に，デリー地区ではジャナタ一党の勝利が急速に信じられるようになった．ビハール州，ラジャスターン州，そして大都市のボンベイ，北部州ではジャナタ一党が勝利を収めるのではないかと予測されだした．それでも国民会議派党員の中には今回の選挙で過半数を占めるであろうと予測する者もいた．首相は，これまでの自己の選挙遊説記録を破り，約一ケ月の間に２５０回の演説を行なった．

インド下院議院の投票は３８３，１８８ケ所の投票所で3月１６日，１８日，１９日，２０日に行なわれた．約3億2千万の有権者は，それぞれの投票所に出むき投票を行なった．3月１６日デリー地区の投票所前に設けられた，国　民会議派とジャナタ一党のテントの前には，自然に支持者が集まり出した．各投票所前に設けられた両派のテントに集まった人垣を見ただけで選挙結果が予想された．

投票が終わり，専制政治か民主主義かの決定がおこなわれる開票が始まると，人々はラジオの前に釘付けになり，デリーに設けられた新聞社の速報板の前は黒山の人だかりになった．首都デリー地区の７議席すべてがジャナタ一党で占められた．デリーの街中をジャナタ一党の宣伝カーが走りまわり，熱狂した市民は，バスの中，あるいはトラックの荷台に乗って，「ジャナタ一党，万才！」を繰りかえした．刻々と各州。各地区の当選が決定しているなか，B。B。Cが，いち早くウッタル。プラデーシ州ライバレリー地区から立候補したインディラー。ガーンディー首相の落選を報じた．このニュースは，またたく間に国中に広がり，驚きの声が上った．選挙運動の終盤から，あるいはジャナタ一党が勝利するかも知れないという想像は国民のだれもがすることができたが，ガーンディー首相の落選は想像も予想もできなかった．それは，首相の選挙区が保守的農村であり夫のフェローズ。ガーンディーがここを地盤に立候補し，夫の死後ガーンディー首相も一貫してここから立候補していた．それ故にだれもが彼女の落選を予想もしなかった．対立候補のラージ。ナーラヤン氏は１７７，７１９票を獲得し，首相の１２２，５１７票を破り当選した．ラージ。ナーラ

ヤン氏は，「これは，デモクラシーと市民の自由と司法権の独立の勝利である」と語った．同じくアメーティー地区で立候補したサンジャイ・ガーンディー氏も対立候補のジャナター党，ラビンドラ・プラタープ・シン氏に約7万5千票の差をつけられて落選した．選挙結果は皮肉にも中央政権の影響力の強い州ほど明らかにあらわれた．北部州の８５全議席，ビハールの５４全議席，ハリヤーナーの１０全議席，デリーの７全議席，中央州４０議席中３７議席，ラージャスターン州２５議席中２４議席をジャナタ党が占め，国民会議派はわずかにアーンドラ州，アッサム州，ケーララ州カルナータク州で多数の議席を獲得したにすぎなかつた．ジャナター党（コングレス・フォア・デモクラシーをも含む）は下院議院５４２議席中，２９８議席という過半数をこえる議席を獲得した．それに対し，１９７１年の第５回総選挙に３６２議席を獲得した国民会議派は，当時の半数にも満たない１５３議席に落ちこんだ．また，インド共産党も１９７１年の獲得議席の３分の１にも満たない７議席に落ちた．これは，インド独立以来３０年の国民会議派政権の終りと新政権の幕開けを意味していた．続いておこなわれた６月の１０州の州議会選挙でもジャナター党が大勝し，ヒマーチャル州，ハリヤーナー州，ラージャスターン州，中央州，北部州，ビハール州，オリッサ州でジャナター州政府が成立し，コングレス州政府はことごとく崩壊した．

この下院議院選挙・続く州議会選挙での国民会議派の大敗は，非常事態宣言下に行なわれたインディラー政権の諸政策，一般的には強制的な避妊手術政策に民衆の怒りが爆発し，それが国民会議派に大敗をもたらしたとされる．また，ガーンディー首相の自信過剰による選挙運動の展開は，ガーンディー首相の専制政治を明確にしても，民主主義・国民の自由までもは明確にし得なかつた．それに対し，ジャナター党は，政策をかかげるのではなく，自由か統制かと，だれにもわかることを繰りかえしたし，ジャグジーワン・ラーム氏の離党は国民会議派に大きな痛手を与えた．これらが，インディラー政権下，非常事態下に行なわれた強制避妊手術に対する怒りと相乗効果をあげ票数の形で現われたのである．

9　再びビハール

非常事態の宣言される前夜，ビハール運動の指導者Ｊ・Ｐ，その他の指導者が逮捕された．それでも，ビハール運動を支えている指導者達は地下組織を作り，８月１日，８月１５日，９月２日から４日まで不服従運動をおこなった．だがこの闘いは闘争人員の人的打撃をもたらしただけだった．この不服従運動で１万２千人が逮捕され，強力な中央政府の弾圧によって，この運動は地下活動だけに限定されてきた．カルプリー・タークル氏，作家のファニンワルナート・レーヌ，その他の人々はインドとネパールの国境沿いに潜伏し，ビハールから逃げて来た人々の援助等をした．他のインドの町のように非常事態が日常化すると，パトナーの町も一見平常にもどったかに見えた．ただ目につくのは，警官の姿が多いということだった．１９７７年１月１６日総選挙の公布のあと続々と刑務所から，非常事態下に逮捕された人々が釈放されてきた．１月３０日には，再びパトナー市のガーンディー公園でＪ・Ｐの演説が行なわれた．こうして，再びビハール州は，ビハール運動時の活気をみせ始めた．ビハール運動からの一連の運動は下院議院選挙でも団結力を示し，ビハ

ール州５４議席の全議席をジャナター党が獲得した．これまで，北インドで最も封建性の力い州で農村部ではコングレスの力が強かったのが，今回の選挙で全議席の獲得は，ビハール運動の底辺の広さと，権力の弾圧に対する反動によるともいえるであろう．今回の下院選挙で多くのビハール運動指導者が当選したのもその証しである．ビハール・サルボーダヤ協会の会員，学生闘争委員会の会員，カールプリー・タークル氏等がそれである．そして続く州議会選挙でも州議会３２４議席中２１４議席を獲得し，カルプリー州政権が成立した．カルプリー州首相は雑誌記者との会見で「ビハール州は問題が積み重なった山脈のようなものである．行政，教育，経済，政治に関する問題がその山脈である．そして，これらのことで，ビハールはインドの中でも最も遅れた州に数えられている．もう少し，これまでの州政府が，これらのことに真剣に対処していたら，ビハールはもう少しましだったろう．これからは，新しいビハール建設の為に民衆の力，学生の力，サルボーダヤ会員の協力を得て行政を押しすすめてゆく．」と語った．[24] 実際，ビハール州政府が成立すると間もなく，州議会にむけて学生による「政治犯釈放」のデモ行進や，非常事態下に起きた警官によるハリジャン殺害事件に対する調査要求，私立学校の公立化要求と諸々の非常事態下に生じた問題あるいは以前からビハール運動を通じて要求された問題が一気に持ち上ってきた．加えて，大雨による被害で３万人の人が苦しめられたり，その雨によって病気の蔓延等々で，カルプリー政権は出足から苦難の道を歩まなければならなかった．また，ビハール州ジャナター党の中にもタークル政権が以前の国民会議派政権と同じ道を歩みはじめていると批難する者まで現われ，連合政党のむずかしさを浮きぼりにした．ともあれ，カルプリー・タークル政権は８月に非常事態宣言下に逮捕されていた３２９人のナクサライトを釈放し，現実的にタークル州政権は歩みだした．そして，１０月１２日にはビハール州の中等教育までの授業料を無料にした．この無料化はカシミールを除き州単位では最初の事でコングレス政権３０年の歴史でなし得なかったことを実行に移したといえよう．インドにおける教育問題，児童の就学率の低さ，あるいは，文盲率についての論理は「貧困であるから教育を受ける機会がない．[25]」というものであり，授業料の無料化は，この論理に対する解答である．だが，このような政策の実現は，「数えることもできないほどの問題」の一つが解決されたにすぎないのである．政治における公約の実現，あるいは行政機構の改革は一朝一夕になされることではない．だが，たとえ，それを理解していたところで，大衆は現実の生活の中であえぎ渇望する．民衆の望みは性急を常とするのである．政権が変って６ヶ月もたつのになんら著しい変化がないばかりか，物価は上昇してゆく，生活が苦しくなってゆくという火急の現実問題にどのように対処してゆきながら，タークル政権が，かつての国民会議派州政権の成し得なかった「新しいビハール」建設をどのように押し進めてゆくかが注目されるところである．

１０　結び

１９７４年から始まった，ビハール運動の流れを現象的に記述しながら，非常事態宣言下のインド，そして総選挙とその結果までをも，この「ノート」で述べてみた．現象面に絞って記述した結果，この「ノート」は新聞記事的なものになってしまったが，インド独立３０年の歴史の中での

一大エポックを現象面で把えることなしには，より深い政治的分析は難しいと思うからである．例えば，総選挙後，日本のある週刊誌に政治評論家と称する人の「近い将来，バンスィー・ラール元国防大臣によって軍事クーデターが起きるであろう」という分析にあっては，インドの現実の中で生活している者にとっては想像もできないことなのである．それは，現実を的確に把えていないところからくる空想的な評論ということになる．もっとも，週刊誌の評論について信じるに値いしないと言えばそれまでであるが．ともあれ，この「ノート」で述べ得なかったことは多々ある．例えば，インド共産党，マルクス主義共産党の動きは，この「ノート」では述べ得なかった．インド共産党に関して簡単に述べると，総選挙後の厳しい現実を直視し，共産党統一の呼びかけをしている．しかしながら，ジャナター政権[26]，J・Pと共闘体制にある西ベンガル州政府マルクス主義共産党が，インド共産党の呼びかけに応じて統一路線を歩む可能性は非常に薄いと言えよう．また，総選挙後の国民会議派も内紛が長びき，今だに党全体の統制が取れないでいる．10月の総裁追放の内紛は一応，ガーンディー夫人を名誉総裁という形にし，従来通り，ブラフマーナンド・レッディー氏を総裁にすることでおさまったものの，国民の間にあるカリスマ的インディラー像が会議派内にも根強く残っており，加えて，同夫人の言動が強い影響力を党内外に持っている限り，国民会議派が足並みをそろえて野党第一党として力を発揮するのも先のことになろう．ジャナター党政権についてみても，党そのものが国民会議派長老派，ジャン・サング，社会党，コングレス・フォア・デモクラシーなどの寄り合い世帯であり，ジャナター党の分裂可能性の声がたびたび聞かれる現状である．そしてジャナター政権の政策と寄り合い世帯の各党の党目的とが必ずしも一致しないこともあり，たびたび微妙な波紋を投げかけている．なかでも，ジャン・サングの下部組織，ラーシトリヤ・スワヤン・セーワクの問題は野党の絶好の攻撃材料となっている．ともあれ，非常事態期間，総選挙，新政権成立を通じて，各党では党内の問題が何らかの形で表面化され，各党は一種の混乱期と表現することもできよう．

また，ビハール州の動向が全インド的に常に注目を浴びるのは，先に述べたように，ビハール州の持つ問題がそのままインドを象徴するからに他ならないし，これまでインドの中で遅れた州でありながら，政治的には常に進取の気風に富んでいたということによる．

そして，ビハール州の，そして，インドの新政権の行政的手腕は1年を過ぎたあたりから，本当の意味での評価の対象となろう．

1977年11月26日

(註)

1　Dharm yug（1977年6月5日号）

2　1971年総選挙で国民会議派は352議席を獲得したが，野党は166議席しか獲得できなかった．うち，国民会議派16，スワタントラ党8，ジャン・サング22，社会党3，民社党2，インド共産党23，マルクス主義共産党25，その他67．

3　Hindustan Times（１９７６年９月１４日付）

4　Hindustan Times　ヒンディー版　（１９７７年７月５日付）

5　Dinmān　（１９７７年１１月１３日号）Ｐ．２４．ただ，ディンマーンの記事は，１９７０年の貧困水準数であり現在は，それ以上と言われる．これに関しては‘Dharma yug’１９７７年７月１０日号（Ｐ．１２）と８月１４日号，ならびにヒンディー語新聞，Hindustān １９７７年８月１２日の記事を参照されたい．

6　１９７６年４月１日まで工業開発のためビハール州には１６８億ルピーというインドで一番の資本を投入したにもかかわらず，一人当りの収入は２２州のうち２０番目である．（ヒンドスターン誌１９７７年７月５日付）

7　Kālīkinkar，"Bihār men Swātantrya Āndolan kā itihās"　Paṭna．１９７５．

8　この詩の朗読会には，Nāgarjun 氏や Sūrya Nārayaṇ Caudharī 氏など多数が参加した．詳しくは"Dharma yug"１９７７年６月５日発行の Sanpūrn Krānti 号（Ｐ．１６）を参照．

9　この日の演説の全文は"Ｊ。Ｐ"　Amarnāth Seṭh，Sahitya　１９７５年（ＰＰ．１５０～１７６）参照

１０　Dharma yug　（１９７７年６月５日号）

１１　筆者の質問に対するビハール州サルボーダヤ協会事務局長 Rramod Kumār Pureme 氏の回答

１２　"Dharma yug"（１９７７年８月２１日号Ｐ．２０）

１３　Hindustān（Hindi 語版）１９７７年８月８日

１４　"Dharma yug"（１９７７年６月５日号）

１５　ガーンディー夫人が総選挙後，ビノーバー師に面会しに行った件について種々の憶測が流れた．各週刊誌。新聞に，それについての論評が載っているが，アーグラより発行されている地方紙「アマル。ウジャーラー」，１９７７年８月９日の「ビノーバー氏決断せよ」という題の論評はビノーバー師の思想とサルボーダヤ，ビノーバー師とガーンディー夫人，サルボーダヤとＪ。Ｐ，ビノーバー師とＪ。Ｐ，マハトマ。ガーンディーとビノーバー師などについて詳しく論評している．

１６　"Bihar Sarvodya Mandal Kā Prativedan"　Bihār Sarvodaya Mandal，１９７７　P.14

１７　"Emargency kyon ?"Uttar Prodesh　１９７５年

１８　憲法３５２条「国家もしくは領土の一部の保全が侵略や国内の騒乱によっておびやかされたために重大な非常事態の発生した場合，大統領は非常事態を宣言することができる．」

１９　第３９回憲法改正によって，憲法３２９条に新たに３２９条-「Ｋ」が追加された．それによると，『もし，当該人物が選挙時に総理大臣，または，下院議院議長であった場合，もしくは選挙後，その当該人物が総理大臣，あるいは，下院議院議長に選出された場合には，当該人物に関しての選挙に関する法的告訴をすることはできない．そして，その為に別に「いかなる裁判所においても，選挙に関する告訴はできない」旨法令を定める．』と，いうものである．

２０　新聞にも検閲が敷かれ，言論の自由が失なわれた．１９７５年６月２８日付タイムズ。オブ。インディア，ボンベイ版には検閲をまぬがれた「民主主義の死亡広告」が広告欄に載った．

Death

D'ocracy — D.E.M. beloved Husband of T.Ruth, Loving Father of

L.I.Bertie, Brother of Faith, Hope, Justica expired on 26th, June.

２１　Nav Bhārat （１９７６年１１月１日付）

２２　H industan Times （１９７６年６月２５日付）

２３　このＴ。Ｖ番組の変更は，後に新政権下，「シャー委員会」（非常事態下の事件についての聴聞委員会）の召集に応じた時の放送情報大臣，シュクラ氏の指示によってなされたことをシュクラ氏自身認めた．詳しくは「シャー委員会」についての新聞記事を参照のこと．

２４　Dharma yug （１９７７年７月１０日号）

２５　１９７７年１１月２２日のラジオ放送「インドの教育」

２６　インド共産党機関紙．「コミュニスト」（１９７７年８月号）

※　こうして「研究ノート」を書いているうちにも，「パトナ近郊の農村の２５０名の国民会議派会員が地区会議派へ辞表を提出し，ジャナター党へ移った．」（１９７７年１１月２４日付 Nav Bhārat Tāims ）というニュースがあったことを付記しておく．